OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	若狭の国の仏たち
Author(s)	野々村, 富二良
Citation	懐徳. 1978, 48, p. 41-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90567
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

若狭の国の仏たち

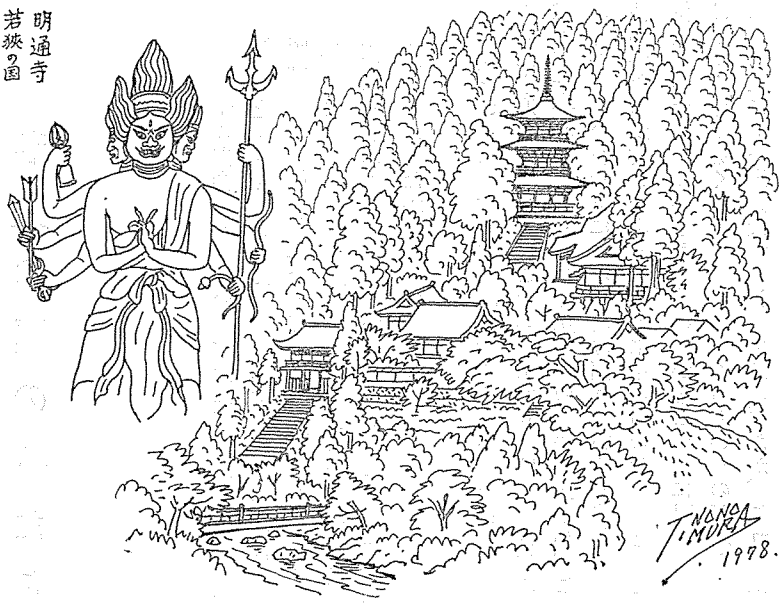
野々村富二良

懐徳堂々友会の本年春の見学会は、若狭の小浜附近の寺々と神社をまわった。四月二十九日天皇誕生日で、講師はいつも御世話になっている、宇野茂樹先生である。参加するもの四十五名、楽しい旅であった。この旅を語る前に少し、若狭という土地が、文化的にみて、どんな所だったかを語っておこう。

若狭といえば、すぐ頭に浮んでくるのが、奈良二月堂の「お水取り」である。この「お水取り」は、二月堂の御本尊十一面観音さまへの罪過懺悔の行法であるが、このとき本堂の石段下にある平素は涸れている若狭井から、清らかな水が湧いて出る。この水を仏前のお香水として供えるのだが、この水が若狭の国からこの時に限って、はるばる地下をくぐって送られてくるというのだから、これは世にも不思議なかみわざである。だが、これにはこんな伝説がある。

むかし若狭の国に、遠敷（おにゆう）明神という神さまがいた。実忠和尚という僧が、二月堂で修二会の行法を行うとき、全国の神々の名を読みあげて、その神々を二月堂に集めたが、この遠敷明神だけがやって来ない。川で釣をしていて、それに夢中で、つい招集におくれてしまった。これを神々からとがめられ、なじられたので、遠敷明神は恐縮してあやまり、そのおわびに二月堂のほとりへ、お香水の水を遠く若狭から送ることを誓った。それからというものは、二月堂で行法が行われる夜半には、堂の下の大岩が二つに割れて、二羽の鵜（う）が飛び出し、清水が湧き出してくるというのである。これが二月堂の若狭井のそもそもの始まりで、このときは若狭の国の遠敷明神の社前の川水が止ってしまうと伝えられている。

この不思議な話を、ただの伝説としてみるよりも、もう少し考えて、遠い古代に遡り、伝説の根源を求めてみ



るのもおもしろい。

古代大陸文化が日本に伝わってきた経路は、いくつか考えられるが、その一つの経路が、この物語りのうちに秘められているのではないか、と思われる。

古代大陸文化が日本に伝わってきた経路の一つに、若狭地方が考えられるのは、朝鮮半島から日本海を渡ってくるルートで、若狭地方に上陸した大陸文化がここに一つの文化圏を育て、さらにそれが琵琶湖の西部を通って、大和地方に入ってきたとみるのである。この文化の大和の土地に入ってきた経路を、伝説の形をとって、二月堂「お水取り」の若狭の水に象徴させたのではないだろうかと思われる。

若狭の小浜附近に、由緒ある古い寺や神社、また仏像など、多くの重文級のものが残っていることは、この地域に一つの立派な文化が栄えていたことを物語っている。このたび、この興味深い地域を宇野先生御指導のもとに、懇切な解説を聞きながら、借り切りバスで次々に回ったのだが、この見学会はいつまでも楽しい思い出となって残ることであろう。

国鉄湖西線、近江今津駅に十時集合して、ここを出発、西へ水坂峠を越えた。峠にヤマブキが咲いていて、黄金いろの花が次ぎつぎに車窓すれすれにのぞく。峠を下る

と雨も上って、薄日がさしてきた。山里の木々の芽ぶきが明るい緑に映えて美しく、ところどころにある桜も満開であった。

最初に訪れたのは、小浜の東方にある真言宗の明通寺である。紀元八〇六年に、坂上田村麻呂が創建したと伝えられている。夏にはカジカが鳴くという緑の木々におおわれた美しい渓流、松永川が下に流れている。ここにかかった朱塗の擬宝珠の橋を渡ると、左手の向うに大きな杉木立があって、その中に四十数段の石段が見え、上に立派な二層の仁王門がある。石段を登りこの仁王門をくぐると左手に鐘楼があり、さらに石段を少し登ると右手に本坊があって、その上手に薬師堂と呼ばれている本堂が見える。

本堂は五間に六間の入母屋造り檜皮葺（ひはだぶき）で、鎌倉中期の国宝である。宇野先生の説明によると、前の向拝は室町時代か桃山時代のものである。

参道の正面つき当り、二十数段の石段の上には、檜皮葺きの軒の深い屋根をもった三重の塔が、どっしりとした安定感をもって、杉の木立の中にそびえている。これも鎌倉中期のもので国宝である。二十五坊が建立されて栄えた往時の隆盛さは見られないが、堂塔山門の遺構から、昔の面影がしのばれてくる。

本堂の内陣を拝観したが、寺僧は寺の由来を語り、御本尊や脇侍などについても説明してくれた。

「この寺の御本尊は薬師如来さまで、檜材一本造りの藤原中期の作でございます。ご円満なやさしいお姿で、御座像のお身たけは一メートル四四余りでございます。脇侍は向って右が降三世明王、左が深沙大将で、このご三体とも重要文化財になっております……」と、静かな名調子で続けていく。

降三世明王も檜材一木造りで、あたりを威圧するするどい三面の顔と、左右に四本ずつの手をもっている。前の手二本で印を結び、他の手は剣や弓矢槍などの武器を持ち、足下には大自在天とその妃、烏摩后を踏みつけている。

深沙大将は、これまた怪異な容姿で、頭にドクロを載き、腹に童女の顔を付け、左手に毒蛇をにぎり、右手に三つ又のホコを持っている。この深沙大将は、三蔵法師がインドへ経文を取りに行ったとき、沙漠の中に現れて、法師を守ったと伝えられている。この降三世明王も深沙大将もともに二メートル五〇もある巨像で、その前に座ればば威圧されそうであるが、これは邪気を払い、悪心欲心を脱却させるように修行僧を見守っているのだという。

中食をとらせてもらった本坊の持仏堂にも、重要文化

財になっている不動明王の等身大の立像が安置されている。これも檜一本造りで平安末期の作である。この不動明王は、以前に安置されていた寺が焼けたりなどして、三転して、明治二四年にここに移されたので、ほんとに火の中をくぐって来られた不動さんである。

この明通寺を訪れるだけでも、国宝、重文になっている文化財を多く見ることができるというのは、先にも述べたように、小浜の周辺が往時いかに文化的に栄えていたかを、よく語っている。

明通寺を出て、遠敷川を渡り、若狭姫神社の前を通って、若狭彦神社へ参った。彦神社は遠敷明神が祭神で、神域全体が簡素なたたずまいで静寂。本殿の前には拝殿はなく、地面に石を礎石のように六個二列に並べた一画があるだけ。ここが祭りをするときの拝殿の代りになる。若狭姫神社へは参拝する時間がなかったが、この祭神は神子姫であると聞いた。神と宮司の間にたって、神さまの降臨を願う役目をもっているという。

これらの二つの神社は、奈良二月堂の「お水取り」にゆかりのある神で、遠敷川上流の鵜の瀬というところの水が、奈良二月堂の下までいく、という話は前述のような次第であるが、「二月堂縁起」によると、二月堂の下の岩が割れたとき、黒白の二羽の鵜がこの割れ目から飛び出して、そのあとから甘泉が湧き出したと記されている。鵜の瀬の鵜が、若狭から奈良まで地下溝を掘り進んで、水を引いてきたということになる。この話をうまく童話にとり入れたなら、さぞかし面白いだろうと思った。

ここからさらに小浜に近い多田のお薬師さんを訪れた。お薬師さんは多田寺の御本尊、薬師如来であって、貞観時代のもの。重文である。手に薬壺を持たないで、印を結んでいる古い形の立像である。出雲の一畑薬師、奈良の薬師寺の薬師と共に、日本三薬師といわれて参詣者は絶えない。左右の脇侍仏は、寺では日光、月光の菩薩といっているが、実は十一面観音であると教えられた。共に重文で、瓔珞（ようらく）、装身具も一木より割出している。この右像は貞観、左像は天平時代のものと推定されている。以上の三仏像は秘仏であるが、拝観を許された。このほかに、貞観時代の四天王立像、藤原時代の弥陀座像三体、聖観音立像などがある。

この多田寺は奈良時代に勝行上人が開いたと伝えられていて、古くは坂上田村麻呂、源満仲が祈願した寺といわれている。満仲はこの地の多田を姓として、多田の満仲といった。この満仲の子が頼光であって、大江山の酒呑（しゅてん）童子を退治するのであるが、そのとき多田寺の住職より、山伏の法を授かったと伝えられている。

この寺は若狭修験道の根本道場なのである。

多田寺からさらに野代にある妙楽寺へ回った。寺の境内は広く景観は美しい。林間の仁王門を入ると、鎌倉時代の方五間、寄棟造り檜皮葺の本堂が向うに見える。重文である。寺の縁起によると、弘法大師が諸国巡歴のとき、多田岳の山中で光明を発するものを見られ、近かづくとそれが千手観音仏であったという。

この観音像は、養老三年に僧行基が彫って、この山の岩屋に安置されていたのであるが、大師は伽藍(がらん)を建立して、ここに移された。これが妙楽寺のそもそものはじまりで、天明のころまでは八坊を有して殷盛をきわめたと言われている。

この千手観音は、お顔が三面になっている温雅な立像で、藤原時代作の重文である。寺の坊さんは観音さまについての話を、一般に分りやすく説いてくれた。

「観音さまは観世音のことで、世の中のもろもろの音を観てござるのです。万物はすべて音を出しているものです。人の喜び、悲しみ、怒りもみな音ですね。観音さまの千の手は、あらゆるものへの奉仕の手であり、また救いの手でございます……」と語り、さらにいろいろと仏さまについての話から、宇宙の生命観にまで、拝観者のだれにも理解できるように説かれた。この法話はこの旅のよい土産となった。

寺には千手観音のほかに、多少風化しているが、藤原時代の聖観音立像があり(県重文)、また外陣拝殿には、慶長年間の絵馬三面や猿猴の図、寛文二年の四条河原の歌舞伎絵馬図が掲げられてあって、江戸初期の庶民的絵画の一端がうかがえる。本堂の前に鐘楼があり、堂の横には地蔵半跏像の地蔵堂がある。

小浜の市街を通りぬけて、北川を渡ってこの日最後の羽賀寺を訪れた。この寺は行基菩薩の創建といわれ、かつては堂塔の完備した寺だったが、今は小高い山林の中に本堂だけが残っているだけである。でも本堂への参道の両側には八重桜が満開で、さびれた寺をはなやかなものにしていた。入母屋檜皮葺の本堂は、室町時代の建造で重文である。御本尊の十一面観音立像は藤原時代の名作だが、いまだに色彩がよく保存されている。衣文があざやかで、官能的な美しさに魅せられる。藤原期の温雅な千手観音、藤原末期の毘沙門天立像と共に重文である。ほかに木造寄せ木造りのずんぐりした地蔵座像が内陣の端にあるが、これは強く印象に残った。木地のままの重量感からきたのだろう。本堂前の石灯籠は大体が南北朝時代のもので、一見に値いする。

若狭の旅は景観もよいが、どうしても古寺めぐり、仏

像めぐりになってしまう。近畿では奈良、京都に次いで近江路と共に仏教遺跡の土地である。日本の文化の歴史を語るには、一度はこの土地を訪れる要があると思う。

（おわり）